

ルーブリック型教材とタブレット端末を活用したメディア制作支援 に関する事例研究

A Case Study about Supporting Media Creation Using Rubric and Tablet Device

亀井美穂子*、安藤祐里奈*、小野寺善彦**、稲垣忠***

Mihoko KAMEI*、Yurina ANDO*、Yoshihiko ONODERA**、Tadashi INAGAKI***

梶山女学園大学*、仙台市立桂小学校**、東北学院大学***

Sugiyama Jogakuen University*、Sendai Katsura Elementary School、Tohokugakuin
University ***

要約：本研究では、リーフレット制作支援をめざして開発した教材を小学校5年生国語科で活用した授業実践を対象に、その実践を整理し、制作中に児童が書いた自己評価ワークシートおよび作品の分析を行った。児童らはグループに1台のタブレット端末を用いて、教材の6観点について、文字、サンプル、解説ムービーを参照しながら確認していた。自己評価の各観点の平均点は「デザイン」のみが低く、改善点として読み手を意識する必要性について触れられていた。また、研究者らが作品を6観点に沿って評価したところ、「構成」「アピール」において児童の自己評価との差が開く結果となった。リーフレット制作時の課題を指摘し、これに対する教材および実践での改善策を検討した。

キーワード： 情報活用の実践力、タブレット、ルーブリック、メディア制作活動

1. 研究の経緯

平成20年の学習指導要領の改訂に伴い、情報活用の実践力の育成が総合的な学習の時間だけでなく、各教科においても取り組まれるようになってきた(文科省 2010)。これをうけ、研究グループでは、教科単元での目標達成とメディア制作活動の質的な向上を目指し、新聞、プレゼンテーション、ビデオ、リーフレットの4つのメディアについての評価基準(ルーブリック)を開発、これに連動したサンプル教材をWeb上で提供してきた(稲垣ら 2011)。

4つの教材の一つ、リーフレットは、新学習指導要領に沿った国語の教科書でも取り上げられており、今後のメディア制作の一つとして取り入れられていくことが予想される。リーフレットとは、チラシやカタログ、パンフレットのような、手に取って見る紙面広告物などを総称した呼び方で、折りチラシとも呼ばれる(高柳 2005)。手にとって見てもらうことを意識しており、限られたスペースに表紙や様々な内容を盛り込むことができるが、一方で、紙面が複数にわたるため、工夫の幅が広がると同時

に、制作の際には、読み手の読む順番などを強く意識することが求められる。そこで本研究では、このような特性を持ったリーフレット制作を支援するために開発した教材を活用した授業実践を通して、本教材の検証を行う。

2. 研究の目的と方法

(1) 目的

本研究では、以下の点を明らかにする。

- ・ リーフレット制作の実践を整理する。
- ・ 実践で本教材がどのように活用されたのかを明らかにする。
- ・ リーフレット制作における課題を明らかにする。

(2) 教材の概要

本研究で取り上げた教材は、4教材のうちのリーフレット制作に関するものである。リーフレット制作時に必要な観点を「つくる」(情報、構成、文章)ステップと「つたえる」ステップ(アピール、図・写真、デザイン)の6つの観点を設定した。それぞれS(すばらしい)、A(よくできている)、B(あと一歩)、C(がんばろう)の4段階に該当する評価

表1 リーフレットの観点および基準

ステップ	観点	S (すばらしい)	A (よくできている)	B (あと一步)	C (がんばろう)
つくる	情報	タイトル、作者、日付、場所、連らく先などを整理(せいり)し、読み手に説明をつけたしています。	タイトル、作者、日付、場所、連らく先などを見やすく整理(せいり)して書いています。	タイトル、作者、日付、場所、連らく先などが正しく書かれていません。	タイトル、作者、日付、場所、連らく先などがぬけていたり、まちがっています。
	構成	伝えたいことによって内容を分け、順番やそこで使う図や写真を考えてならべています。	伝えたいことによって内容分け、順番を考えてならべています。	伝えたいことによって内容を分けています。	伝えたいことが分けられていません。
	文章	正しい文章で、かじょう書きを使ったり、伝えたいところ強調(きょうちょう)するなど工夫しています。	正しい文章で、かじょう書きなどを使って読みやすく工夫しています。	正しい文章ですが、文章ばかりで読みづらいです。	文がまちがっていたり、文章ばかりで読みづらいです。
つたえる	アピール	内容に合った見出しやキャッチフレーズをつけ、色や大きさなど工夫しています。	内容に合った見出しやキャッチフレーズをつけています。	見出しやキャッチフレーズを付けていますが、内容と合っていません。	見出しやキャッチフレーズがなく、どこから読めばいいのかわかりません。
	図・写真	伝えたいことに合った図や写真を選び、大きさや見せ方を工夫している。	伝えたいことに合った図や写真を用いている。	図やグラフ、写真を使っていますが、伝えたいことと関係(かんけい)がありません。	図やグラフ、写真をほとんど使っていません。
	デザイン	文字、図や絵の場所、色や大きさを工夫し、読み手がどのように読むのか考えています。	文字、図や絵の場所、色や大きさのバランスがとれています。	文字、図や絵の場所を整えています。色や大きさがバラバラです。	文字、図や絵がバラバラで読みづらいです。

内容を設定している。それぞれの段階ではサンプルと解説ムービーを随時参照することができる。

(3) 授業実践

平成24年1月に行われた小学校5年生国語科の単元「伝えよう委員会活動」で、男子14名、女子16名、計30名が本教材の活用を行った。この時の様子は授業の参与観察を行い、授業の様子はビデオカメラで撮影した。

(4) 分析対象：児童の作品に対する自己評価

第6時に、ループリックの6観点に沿って児童が自己評価をした29のワークシートを対象に分析を行った。分析の際、「S」を4点、「A」を3点、「B」を2点、「C」を1点と得点化した。

(5) 分析対象：児童の作品の観察者評価

最終的に提出のあった29作品について、第6時の授業観察を行った著者らのうち2名が、ループリックに沿って評価を行い、お互いの得点を比較し、異なる評価になった場合、協議して得点を決定した。

3. 単元の流れと授業実践

(1) 単元の目標と流れ

小学校5年生国語科の単元「伝えよう委員会活動」の学習目標は以下の3点である。

- ・ 委員会の活動報告を読み手の興味をひくように工夫してまとめようとする。
- ・ 報告の文章を書くために、効果的な構成を考え

て書く。

- ・ 読み手に効果的に伝えるために写真や図表などを用いて書く。

単元の流れは9時で構成され、そのうち本教材は、第2、5～7時で活用された(表2)。

表2 単元の流れ

時	学習活動	本教材
1	学習の見通しを持ち、実際のリーフレットを見て、工夫に気付く。	
2	「つくってつたえる」の例を見ながら、リーフレットに必要な事柄を考える。	○
3	自分が所属する委員会の活動について報告する事柄を決め、構成メモを書く。	
4	リーフレットに必要な資料を選び、レイアウトを考える。	
5～7	見出しを立てたり、写真や資料を使ったりして、読み手に分かりやすくなるように工夫をしてリーフレットを作る。	○
8	作ったリーフレットをお互いに見直し、表現の工夫などについて考える。	
9	交流会を開き、完成したリーフレットを4年生に読んでもらう。	

(2) 授業実践の概要

本教材が主教材として活用されたのは第6時である。制作中のリーフレットの改善点を考える活動の中で、本教材が活用された。

委員会は9(給食・掲示・計画・広報・飼育・図書・体育・保健・放送)あるが、各委員会は2～5

人であるため、教材を参照する際は委員会ごとに6班に分かれた。各班1台のタブレットを使い、教材を参照しながら、それまで制作してきたリーフレットを6観点で評価し、配布されたワークシートのリーダーチャートに自己評価を記入していった。

教師は、文字を中心に見ているものの評価が進まない班に対しては、実践者がサンプルや解説ムービーを見るよう促す場面が観察された。

班の中で評価を確認し合う様子も観察された。また、ワークシートに記載されている「どうしてそこに付けましたか?」「どこをどのように直しますか」という課題にも取り組んだ(図1)。

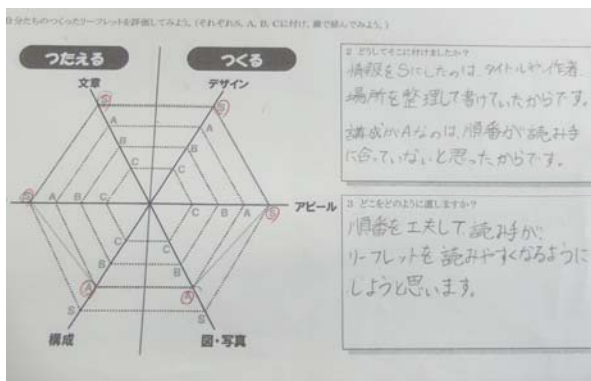


図1 ワークシート記入の実際

4. 結果と考察

(1) 自己評価(ワークシートをもとに)

第6時で児童がワークシートに記入した6観点の評価の平均は、「デザイン」が3.0で、それ以外の観点は3.4であった(表3)。またいずれの観点も、最低は2~3点、最高はすべて4点であった。

表3 児童の自己評価(n=29)

ステップ	観点	平均	最低	最高
つくる	文章	3.4	2	4
	情報	3.4	3	4
	構成	3.4	2	4
つたえる	図・写真	3.4	2	4
	アピール	3.4	2	4
	デザイン	3.0	2	4

※S(4点)、A(3点)、B(2点)、C(1点)

サンプルなどの教材の活用については、「サンプルを見て自分のリーフレットとくらべてみて自分のよいところと悪いところがあったのでS・A・Bにつけた」(男児)などの記述に見られるように、

文字だけでなく、サンプルが有効であったことが示唆された。

表4 作品の観察者評価(n=29)

ステップ	観点	平均	自己評価との差
つくる	文章	2.8	-0.6
	情報	3.7	+0.3
	構成	2.5	-0.9
つたえる	図・写真	3.0	-0.4
	アピール	2.5	-0.9
	デザイン	2.5	-0.5

※S(4点)、A(3点)、B(2点)、C(1点)

(2) 作品の評価

完成作品は、いずれの作品にも表紙、見出しや文章、写真や図が用いられ、各委員会の活動場所や委員名等が記載され、ルーブリックを意識した出来となっていた。また、本実践では、折り方は児童に選ばせており、二つ折り、三つ折り、四つ折り、観音開き、ジャバラ折りなど、折り方は多岐にわたった。

ルーブリックに基づいて筆者らが作品を評価した結果が表4である。児童たちの自己評価に比べると、比較的评价の差が少ないのが「情報」「図・写真」で0.3~0.4ポイント差である。「情報」については自己評価と観察者評価ともに、観点の中で最も高い。

「文章」と「デザイン」については0.5~0.6ポイント差となり、やや差が開く。さらに「構成」「アピール」では0.9ポイント差と、差は大きく広がっている。

(3) 考察

ここでは「構成」「アピール」で1ポイント近い差が出たことについて検討を進める。

まず「アピール」については、「内容に合った見出しやキャッチフレーズをつけ、色や大きさなど工夫しています(S基準)」とあり、これに従って、キャッチフレーズや見出しを、大きくしようとしている作品もあるが、一方で、他の要素も大きい文字にし、逆に強調されなくなってしまうたり、キャッチフレーズがないものもあった。

また、作品の中で目立ったのが、読み手がどのように読むのか考えられていないと考えられる作品が29のうち7作品、修正の余地があるものは6作品に見られた。例えば、二つ折り、右開きで始まっていて、表紙を開けると、左ページから横書きで、

文章が書かれている場合や、左開きで始まっていて、表紙を開けると、右ページから縦書きで書かれている場合、さらに左ページの情報のまとまりに「1」、右ページのまとまりに「2」と、番号をふって読ませる順番を書いている作品も見られた（図2）。



図2 左開きで、縦書き。かつ左を最初に、右を次に、読む順番を数字で指示している。

これらに関わってくる観点としては、「構成」と「デザイン」が考えられる。「構成」の中には「伝えたいことによって内容を分け、順番やそこで使う図や写真を考えてならべています（S基準）」とある。また、「デザイン」には、「読み手がどのように読むのか考えています（S基準）」とある。それぞれの観点に照らしながら活動を進めれば、「構成」で伝えたいことやそれを伝えるための素材を考え、「デザイン」で読み手を意識しながら配置するという一連の活動につながると考えられるが、先の13作品の例では失敗している。

児童の書いたワークシートでは、「デザイン」の自己評価をする際、「読み手を意識していなかった」という気づきが書かれていたものもあったが、最終的な修正につながっていないことが明らかになった。

5. まとめと今後の課題

メディア制作の一つとして、リーフレット制作のためのループリック型の教材を実際の授業でタブレットを用いて活用し、子どもの自己評価と作品の分析を通して検証を行った。

実践では、普通教室で、6班にわかれ、本教材を各班1台のタブレット端末で見ながら学習を進めていた。児童らは、ループリックの内容を声に出して読んだり、サンプルを参照して自己評価を行い、これを修正に活かしている様子が観察され、またワ

ークシートにも修正すべき箇所を観点に照らして記入していた。

児童らの作品は、ループリックの観点に即したものになっており、文字としても、また視覚的にも理解し、作品に活かすことができたと言えよう。しかし、ループリックに基づいて児童らが第6時に行った自己評価と、観察者評価とでは、「構成」「アピール」の二つの観点で差の開きが生じる結果となった。特に、読み手の導線が考えられていないなど、表紙の位置と、縦書き、横書きが一致していないケースが見られた。

これらの問題は、リーフレットの紙面が複数にわたり、これに伴って制作時には、読み手の読む順番などを強く意識することが求められることに起因していると考えられる。これに対しては、教材の改善、実践の工夫が考えられる。例えば教材改善については、読み手の導線を強く意識できるようなループリックの文言やサンプル、解説ムービーの中で失敗例を追加する、などが考えられる。また授業の工夫については、途中で他者に評価してもらう活動を取り入れたり、またタブレット端末に付属するカメラを活かし、他者がリーフレットを読んでいる様子を録画して観察をし、そこで気付いたことをふまえて修正を行うなどの活動が考えられよう。

今後も実践を重ね、児童の認識とループリックの観点および基準、そしてサンプルをすり合わせる必要がある。

謝辞

公益財団法人パナソニック教育財団の「平成23年度先導的実践研究助成」（『つくって伝える』学びの質的向上を目指したループリック連動型Web教材の開発）研究代表者：稲垣忠）による研究の成果である。

参考文献

- (1) 文部科学省（2010）教育の情報化の手引き
- (2) 稲垣忠・遠藤麻由美・亀井美穂子・寺嶋浩介・中橋雄（2011）児童のメディア制作を対象としたループリック型教材の開発とタブレット端末による学習支援の試み、第37回全日本教育工学研究協議会（丹波）
- (3) 高柳ヤヨイ（2005）レイアウトのデザインを読む。、ソシム